

# 第一章 旧約が面白い

私の青年時代には、教会に行く時、新約聖書だけを持っていくのが常識でした。礼拝の説教もほとんど新約聖書からなされていました。今からふりかえって見ると当時のキリスト教信仰は、きわめて倫理的で、「すべき」、「すべきでない」という制約に囲まれていたように思います。「聖日厳守」とか、「禁酒禁煙」などというスローガンがありました。これは、聖書を教科書的に読んでいたから、そうになっていたのではないのでしょうか？前にも述べたように、旧約聖書を倫理の教科書にしようとする、ごく一部の物語を除いて、あまりお手本になる記事がなかったからだと思います。

マタイによる福音書五章一七節に、イエスの言葉として、次のように書いています。

わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。

「律法や預言者」というのは、「旧約」ということです。当時は、まだ新約と旧約という分け方は確立していなかったからです。マタイは、イエスを旧約の完成者と見ていた、ということです。「廃止するためではなく」と言っていることに注目しましょう。「旧約が駄目だから」と言っているわけではありません。

ここで、キリスト教が、聖書を旧約と新約に分けている理由を考えておきましょう。ユダヤ教もイスラム教も私たちが旧約と読んでいるものを聖書としています。キリスト教だけが、旧約と新約の両方を聖書とし、それが、キリスト教の正典とされているのです。

「新約」、「旧約」の「約」という言葉は、言うまでもなく「契約」の「約」です。誰が誰に対して行なった契約か、というと、神が、ご自分の民と結ばれた契約ということです。それは、現実的には、アブラハムに始まるイスラエル民族に対してなされた契約でした。なぜ、神が契約を結ばれたのか、という理由が、創世記一二章一節から三節に示されています。

主はアブラム（アブラハムの改名以前の名）に言われた。

「あなたは生まれ故郷

父の家を離れて

わたしが示す地に行きなさい。

わたしはあなたを大いなる国民にし

あなたを祝福し、あなたの名を高める

祝福の源となるように。

あなたを祝福する人をわたしは祝福し

あなたを呪う者をわたしは呪う。

地上の氏族はすべて

あなたによって祝福に入る。」

つまり、「地上のすべての氏族の祝福の源となるように」というのが、神の選びの理由であり、目的でもあったのです。その数百年後に、エジプトで奴隷状態だったイスラエル民族をモーセとその後継者であるヨシュアがリーダーとなって、エジプトを脱出させ、神の約束の地カナン（パレスチナ）に移住させます。往年の有名な映画「十戒」で、聖書に書かれたことがそのとおりに起こったように、大スペクタクルの場面で表現されていたのをご覧になった方も多いと思います。

エジプト脱出の途上、モーセがただ一人で、石の板二枚に刻まれた神との一〇箇条の契約をたずさえてシナイ山から下りてきます。内容が、旧約の出エジプト記二〇章一節から一七節に記録されています。

神はこれらすべての言葉を告げられた。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。

①あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。

②あなたはいかなる偶像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。

③あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかない。

④安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。

⑤あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることが出来る。

⑥殺してはならない。

⑦姦淫してはならない。

⑧盗んではならない。

⑨隣人に関して偽証してはならない。

⑩隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。」

第四戒と第五戒を除いて、他はすべて禁止命令形となっています。だから、神との契約を守るためには、この禁止命令に背かないことが大切だ、と受け止めるのは無理もないことです。「神の民」イスラエルは、そのために必死になって、この契約を守ろうとしました。「神の民」である

か、どうかの区別は、この契約を守っているか、どうかだとして、この契約を守っている人を「義人」とし、守っていない人を「罪人」としました。これは、必然的に「罪人」を排除することになってしまいます。「罪人」とは付き合ってはならない、という習慣が出来てしまいます。これでは、神さまが、ご自分の民をお選びになった目的、つまりすべての人の祝福の源となる、という目的を見失ってしまいます。

ところが、新共同訳旧約聖書注解I（日本基督教団出版局、一九九六年三月一五日初版、一五六頁）によると、この禁止命令は、文法的には、「否定詞二人称単数未完了態」といって、「……であろうはずがない」を意味し、神の人間に対する強い期待と願いを表す語法だそうです。内坂晃先生の著書「荒野を見る目」（教文館、一九九〇年八月二〇日、初版、一三八頁）の中で、先生は、こう言っておられます。

「このように『十戒』を単なる宗教的倫理規定としてではなく、人格的な神の呼びかけ、愛の約束、民を真の命へと導かんとするための戒めとして受け取る時、私たちは、ようやく『十戒』を正しく読むための姿勢を獲得したのであります。これらの戒めは、民が本当に生きるように神が招いていたもう愛の呼びかけである。そのような神との人格的な愛の関係を欠落させてこの『十戒』を読む時にそこにどういう事態が生み出されてくるのでしょうか。それを、私たちは新約聖書に出てくるパリサイ人や律法学者の姿に見ることができます。神の律法を守ることが、それを武器として自分がおごり、他を軽蔑し、その誇りで自分を支えようとする。彼らにとっては神に祈りはしても、本当は神に支えられる必要など感じていないのです。そして律法を守りえないものを軽蔑する。」

こうして、本来の「神の民」が、その使命を見失ってしまったために、神がみずから人となられた、と信じるのがキリスト教なのです。その方が、イエス・キリストと呼ばれた方でした。最初に引用したイエスの言葉、

わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。（マタイ五・一七）

の意味は、旧約に示されている神の真意、つまり福音をはっきり表わすためであって、旧約を廃止するためではない、ということだ、と私は受け止めています。だから、旧約の言わんとすることは何なのか、を受け止め、イエスがそれをどのように表わしたのかを読み取らないと、見当はずれな読み方をしてしまう、と私は思っています。

それでは、まず、旧約の「面白さ」を味わってみましょう。